



洋書輸入協会会報

Vol. 28 No. 9 (通巻328号) 1994年9月

理事会報告

9月16日(金)

(一) 7月、8月分収支報告

9月9日(金)開催の総務委員会で審議の総務委員長報告を承認した。

(二) 委員会報告

前回の報告に続きその後の委員会活動が各委員長より下記の通り報告された。

イ. 事業委員会

東京国際ブックフェア95で開催予定の洋書バーゲンセールに参加条件はリード社の大幅譲歩で参加費が総売上額の7%~15%(500万円~1,500万円以下の500万円単位ごとの売上による)に決まり基本的に合意した。

ロ. 広報渉外委員会

活動方針としては、業界全体の利益を守る為の広報活動にあるが、当面の問題として消費税(大学の入札問題)と外国のマークアップ事情調査の二点をとりあげることにした。

ハ. 文化厚生委員会

7月22日開催のビアパーティは246名の出席者があり大成功裏に終了した。

(三) 中央区勤労者共済会入会

JBIA事務局の上記共済会への入会を承認した。

海外ニュース

米国・カナダの学生と出版動向

カナダの大学生は、コンピュータ・ネットワークによる情報やCD-ROMよりも伝統的な冊子体の本で勉強

する方が好き、という傾向が先頃コンサルタント会社の Environics Research Group とカナダ出版評議会 (CBPC) が行った調査の結果明らかとなった。

調査は2,547人の大学生を対象にして行われたもの。それによると、コンピュータの利用は現状にとどまり、CD-ROMの受容は今後伸びそうであるが、49%の学生が紙に書かれた従来通りの形態のテキストが最も好ましいとしている。CBPCの会長の Dave Jimmel氏は、テレビが冊子体テキストの代わりとなれなかったのと同様、電子出版も冊子体を駆逐するというよりは新しい選択肢として発展するのではないかとみている。ちなみに、フロッピー・ディスクの方が好きだと答えた学生は22%、オンライン・サービスは15%、CD-ROMは14%となっている。

一方、カスタム・メイドの教科書を出版するサービスはこれまでも McGraw-Hill などが行ってきたが、この程同じく米国で South Western College Publishing 社がシグネチャー・シリーズと称するサービス・システムを始めた。これは、教授、学生、書店の個々の要望に合わせた読みの教科書を作るというもので、たとえば従来のテキストでは対処できない教授内容を盛り込んだり、各種のテキストを取捨選択し組み合わせたりすることもできる。また、このシリーズでは South-Western 社の既刊タイトルで品切れとなったものが再び入手できるほか、ワーキング・ペーパーや教授自身の論文などを盛り込むこともできる。装丁は様々なタイプから選択可能、オーダーから納品までわずか5週間程度ということであり、北米の冊子体のテキスト出版はまだまだ活気のあることが伝わってくる話である。

—BP-Report '94年7月11日号より—

理事会報告	1
海外ニュース	1
JBIA ビアパーティ 1994	2

会報についてのアンケート	3
うちの会社	4
洋書輸入協会史90	5

東京の坂と橋と文明開化49	7
広告	8

JBIA ビアパーティ 1994

7月22日(金)に第2回の「JBIA ビアパーティ」が催された。場所は、昨年と同じ新宿南口のホテル・サンルートである。参加された会社員数は、54社、参加者は246名と昨年に比べると70名以上の増加であった。熱気があふれかえり、将にこれが1994年夏の猛暑、熱暑を暗示していたのではないだろうか。主催の文化厚生委員会の委員長である紀伊國屋書店の吉本専務の挨拶は、「元気でいきましょう!」という元気の良い掛け声であり、これも又、大不況からようやく上向きかけ始めた日本の景気への先駆けであったのではないだろうか。

司会進行は、これ又元気印の大洋交易の和田さん。円高だ、外資だ、不景気だなんという小難しいことはとりあえず脇に置いて、愉快地ワッと皆を飲ませてしまうにはピッタリの方です。当日のお楽しみにビンゴゲームが用意されていて、和田さんは自社から選り抜きの美女2名をビンゴガールに連れて来てくれました。ビンゴは初の試みだったし、賞品もささやかなものだったが、これが結構大受けて、“わずかばかりの運の悪さをうら

んだり”している人も沢山いました。

私の会社では年末のクリスマスパーティには、このビンゴゲームを行うのが定例だが、私は入社以来一度も賞品を手にしたことが無く、クジ運の悪さは飛び抜けていると自負していた。ところが、今回、何と何と一番にビンゴになったのである。こういう晴れがましいことに慣れていないので、賞品を貰う時にボーッとしていて、目星をつけていた賞品を選びそこねてしまった。

パーティは、ビンゴの盛り上がりもあって、皆さん良く飲み、良く食べ、良くシャベリの楽しいものだった。終り近くなって、会場舞台ではカラオケが始まり、とてつもなく上手い人やら、チャッカリとカワイコを引っ張り出してデュエットする人やらでにぎわっていたが、私は既にいつも通り出来上がっていて詳しいことはわからない。とり合えずの中メめをゲーテ書房の村山さんが行って、ビアパーティは終了となった。ホテルの外は、暑い夏を予感させる熱い風が吹いていた。(E A記)



お知らせ

(株)医学書院ではこの度一部役員の移動を行い、長年協会にご尽力を頂きました洋書部担当常務の石原隆之氏

は制作担当に変わられました。

後任として西沢正之氏が洋書部担当常務に就任され、協会理事(代)及び総務委員長を引き継がれました。

洋書輸入協会会報についてのアンケート

—その集計と分析—

会報委員会は本年4月「会報についてのアンケート」を行なった。会報は会員と関係諸団体に毎号490部配送されているが、4月号の発送にあたり、一応そのすべてに「アンケート用紙」を挿入した。

6月末までに回収されたのは44通で、無記名のものもあるが、すべて会員からのものと推定される。これは、会員数117社の38%に相当するが、これを妥当な数字とみるか、不満なものとするかは、みるものの視点によって異なるものであろう。「会報委」としては70%程度の回答が欲しかったというのが偽らざるところである。

以下、項目を追って集計の報告をするとともに、その分析を試みることにする。

(1) 会報を読んでいるか。

読んでいる…40、ときどき読む…4。

「読んでいない」という回答が皆無であったことは、不回答者の大部分が批判的であるよりも、むしろ無関心であることを示すものではなからうか。

(2) 読まない理由。

上記の理由からこの欄に記入したものは0であった。

(3) 読むのは誰か。

全員に回覧…18、特定のもののみに回覧…9、社長と役職者…8、(以下略)

従業員30名以内のところなら全員に回覧も可能でありそれが40%を占めるということは、会員の大部分が小規模企業であることを示すものといえよう。

(4) 特に関心のある記事は。

関心ありとして、書き出されたものは(5)の回答と重複する。むしろ、そのような記事は「ない」とはっきり意思表示をしたものが16、無記入が10、合計60%にのぼることに注目すべきであろう。

(5) 月例記事のなかで読むものは。

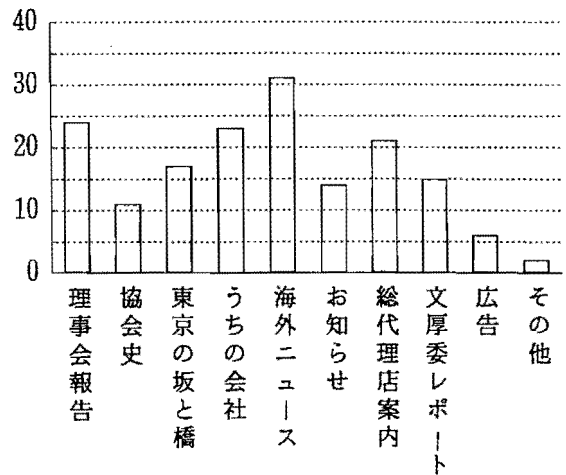
海外ニュース…31、理事会報告…24、うちの会社…23、総代理店案内…21、東京の坂と橋…17、文化厚生委員会関係レポート…15、お知らせ…14、協会史…11。

この数字から読み取れることは、業界の情報を伝える記事がまず読まれるということで、特に上位ふたつの記事などは、よりいっそう密度の高いものにする必要があ

(1994年4～5月)

JBIA 会報アンケート

記事名	数
1. 理事会報告	24
2. 協会史	11
3. 東京の坂と橋	17
4. うちの会社	23
5. 海外ニュース	31
6. お知らせ	14
7. 総代理店案内	21
8. 文厚委レポート	15
9. 広告	6
10. その他	2



(6) 月例記事以外に関心をもつものは。

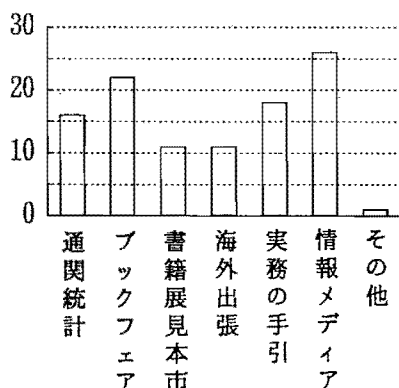
最新の情報メディアに関するもの…26、国際的なブックフェアのレポート…22、実務の手引になる記事…18、通関統計…16、海外出張の体験記…11、書籍展・見本市の案内…11。

ここには今後の会報に期待するものがあらわれている。その期待にこたえることは必ずしも容易ではないが、会報委としてはこの線に沿った努力をすべきであろう。

(1994年 4～5 月)

JBIA 会報アンケート

記 事 名	数
1. 通関統計	16
2. 図書展レポート	22
3. 書籍展・見本市	11
4. 海外出張体験	11
5. 実務の手引	18
6. 情報メディア関係	26
7. その他	1



(7) 意見・希望。

いくつかの意見等が寄せられたが、そのなかから主だったものを列記する。

◎業者間の意見交換と交流のための頁を、◎客から業者への意見をのせて欲しい。◎理事長と関係官庁等との書籍貿易に関する対談を企画したら、◎会報委員が匿名で放談・座談会をやってはどうか。

△毎月の記事がパターン化してつまらない。

△内容を再検討の必要あり、△ゴルフコンペの成績の掲載はムダ。☆本だけにこだわらないで趣味の記事なども物せたら。☆本に関するエッセイなど読んで楽しい記事を。

回答者についていえば、無記名が12社あり、記名された32社のうち1社で複数の回答を寄せられたところが2社あった。

今回のアンケートははじめてのことであり（25年ほど前にいちどやったような記憶があるが…）質問の設定などに不充分なところがあったかもしれない。

ご協力くださった会員の皆様に感謝の意を表したい。

〔会報委員会〕

うちの会社

(株) 郁 文 堂

洋書輸入協会会報 Vol. 2 No. 1 を見ると「会員紹介」欄に「うちの会社」の洋書取扱いの沿革が書かれてあった。洋書の輸入販売をするようになったのは昭和25年頃からと記されている。郁文堂の本業はドイツ語教科書の出版であるから、大学でドイツ語を教える先生、主としてドイツ文学研究者がお得意さんである。当時のゲルマニスト1000人くらいのうちドイツの原書を注文して下さる人は150人もあったであろうか。発注は顧問の専門家にお願いし、輸入書の整理配送をしているうちに昭和38年（1963）には売り場を設けて在庫商品を並べ、出張販売、通信販売を行うようになった。ドイツ語学文学関係しか扱わないから医学書その他は丸きりない代りに、ゲルマニストの欲する分野は

最も充実しており、新刊情報も頗るくわしく精密である。それでも在庫品がどんどん捌けていくわけではないし、購入図書予算目録を作ってもすべてが当店扱いになるわけではない。販売原価を総べて売価に反映させることは至難であるし、納入代金の回収にも手間暇がかかりすぎるようである。

創業95年になる郁文堂は、大正のはじめ（1912）からドイツ語教科書の出版を手がけていた関係で、古書部の時代の扱いもドイツ書が多かったし、独和辞典・和独辞典も出したし、ドイツ政府から3週間の旅行に招待されたりしてとかく縁が深く、ドイツびいきになってしまっている。そんな会社なのである。

洋書輸入協会史 (90)

洋書輸入協会顧問 相 良 廣 明

104 昭和38(1963)年度(s38.4月～s39.3月)の規約改正、理事改選、新入会員、退会者、業界消息など(前号よりの続き)

104.7 業界消息(前号よりの続き)

(3) 日本出版貿易二部上場

昭和38('63)年8月24日付の株式新聞に、日本出版貿易株式会社がいよいよ第二部に株式を上場する旨の記事が掲載された。それによれば同社の売上構成は、

輸出出版物 64.3%

輸入 " 24.2%

輸出雑貨 11.5%

であり、公開価格は100円、公開日時は9月2日、幹事は山一証券で、昭和39年3月期の推定売上高は、11億円に達すること。

(4) 経営不振の情報

昭和38('63)年10月10日の理事会では、会員の某社が受け取ったA商事の手形が落ちない、B株式会社は銀行取引が停止されており、米国にも多くの焦げつきを作っている由。また昭和38年末に岩戸景気が終わり、昭和37年10月には不景気の谷底が来ているので、その影響が尾を引いて各社ともに入金が悪く困却しているなどの話が出る。

12月21日の理事会では、年が明けると、金融引締めが行われるだろうとの推測も行われている。そして実際に翌昭和39('64)年1月には、日銀の貸出増加額の規制が実施された。

(5) 新規同業者

昭和39('64)年1月14日の理事会では、昭和38年中に創業された同業者として、白鷗洋書、東京洋書、富士洋書、オリンエンタル・ブック・セラーズなどの名前が挙げられた。

また以前にタトル商会に勤めていた高橋氏と佐堀氏が守田氏と共に協和図書を設立、その後高橋氏と佐堀氏が外に出て別の会社を設立したとの話も出ている。景気の悪い話が出ている一方で、新規の同業者が増加しているのも、自然の成り行きであろうか。

(6) 東京大学出版会、洋書のリプリント版の刊行を開始

昭和39('64)年1月に、東大出版会は合法的リプリント版を3点出版し、今後も刊行を継続するとの発表があった。協会としては、海賊版対策として合法的リプリント版が出版されることを歓迎する立場にあるので、2月10日に理事会代表として丸善、紀伊國屋、日貿の三社で東大出版会を訪問し、流通の問題を中心として懇談の機会を持った。

(7) Books for Asia、洋販が面倒を見ることとなる

Books for Asiaのオーナーである香港のリー氏から、日本の同社の面倒を見てくれないかと、洋販の渡辺社長が頼まれることになるとうと、昭和39年2月12日の理事会で話が出ている。

104.8 社名、代表者、所在地の変更と東京連絡所の新設

(1) 社名及び代表者変更

昭和38('63)年6月、下記の届けがあった。

旧 東京中央書籍株式会社 代表取締役 島谷逸夫

新 中央洋書株式会社 代表取締役 前橋康弘

(2) 所在地変更及び東京連絡所の新設

昭和38('63)年10月15日付、JBIA No. 174 では次のように会員に知らせている。

記

今般、緑書房(代表者 丹羽正之氏)の所在地が下記の通り変更されました。

旧 北区堂島上2-41 鈴木ビル

新 北区堂島上2-33 鈴木ビル

また去る10月1日より、下記の通り東京連絡所を開致しました。

代表者名 伊藤 豊

所在地 千代田区神田美土代町12 新井ビル

東京洋書株式会社内

104.9 人事消息

(1) Van Nostrand の Mr. Tenbrock 来日

昭和38('63)年8月7日の協会懇談会に、米国 Van Nostrand 社の Mr. Tenbrock が出席挨拶したが、話の中に傾聴に値する示唆があったので記しておこう。

「皆さんには新しい本ばかり追いかける傾向があるが、古いタイトルの方が量的に遙かに多いし、また Profit も多い。そこに膨大な市場が残されていると思う」

(2) Feffer 社の信木氏が、講談社インターナショナルの役員となる。

同年2月に Feffer 社が Doubleday 社に買収され、同社社長の Mr. John T. Sargent が来日したことは前述したが、Doubleday 社と講談社インターナショナルは密接な関係がある模様で、9月11日の理事会に Feffer 社のリプレゼンタティブの信木氏が、講談社インターナショナルの役員に就任した旨報告があった。

(3) Johns Hopkins 及び Stanford U. P. から来日

同年10月11日付の JBIA No. 173 で、10月23日の協会懇談会に The Johns Hopkins Press の Director, Mr. Harold E. Ingle 及び Stanford Univ. Press の Director, Mr. Leon E. Seltzer を招く旨会員に知らせている。

(4) 海外出版貿易の吉兼三郎氏退職

海外出版貿易株式会社勤務中の吉兼氏は、昭和39('64)年2月に退職の上、郷里の名古屋の吉兼鉄工所に勤務する旨の挨拶があった。

(5) Longman 社の Mr. Hepburn、理事会で挨拶

同年2月25日の理事会に、英国の Longmans, Green & Co., Ltd. の Sales Manager, Mr. P. B. Hepburn が、ブリティッシュ・ブックスの酒井氏と共に出席、挨拶懇談を行った。

(6) Feffer 社の Mr. Simon、懇談会に出席挨拶

同年3月11日の協会懇談会に、Feffer & Simons, Inc. の Mr. Sanford R. Simon が出席し挨拶した。

104.10 懇親旅行と新年会

(1) 懇親旅行

昭和38('63)年6月14日付の JBIA No. 167-A では、次のように懇親旅行の予定を知らせている。

記

懇親旅行会のお知らせ

下記の通り懇親旅行会を催しますので、多数ご参加下さるようお願い申し上げます。

期 日 7月14日(日)、15日(月)

目的地 伊東温泉(菊屋旅館・冷房あり)

会 費 1人、3,500円(片道運賃及び宿泊費を含む)

(以下略)

旅館に冷房ありとわざわざ注記するところや、一泊3,500円という低価格は、当時の世情を反映していて面白い。

(2) 新年懇親会

昭和39('64)年の新年懇親会は、1月14日(火)午後6時から、神田須田町の以せ源で開催された。

104.11 その他の出来事

(1) Cambridge U. P. が Donald Moore を Exclusive Agent とする。

これまで Donald Moore (JAPAN) Ltd. は、英国の主な出版社(子会社・関連会社は数えず)だけでも30数社に及ぶものの Representative であったが、昭和37('62)年には Thames & Hudson 社の、昭和38('63)年に入ってから Edward Arnold (Publishiers) 社の Exclusive Agent となり、更に大出版社である Cambridge Univ. Press の Exclusive Agent に指定されたので、協会理事会で問題として取り上げられるようになった。

問題とされた理由は、直輸入・直販の同業者が Exclusive を取るのと異なり、representative であり、Stockist である Donald Moore が Exclusive になるのは、先例も少なく、また卸先の同業各社の販売努力の上に乗ったものであり、さらに小売各社の利益を削る結果となりかねないという所にある。

総代理店の問題は、各社の利益と密接な関係があるために、以前から紛争の種であり、それは今日にも及んでいる。戦前は丸善のシェアーが非常に大きかったために、あまり問題にならなかったが、戦中戦後の長い洋書輸入の中断の後は、海外各社が Exclusive を日本に与えることを控え、様子を見ていた時期が続いた。それが昭和30年代半ばを過ぎると、日本の外貨事情も相当に好転し、そろそろ日本に Exclusive Agent を設けても良いという雰囲気は海外出版社の一部に出てきたように思われる。

このような客観情勢と Donald Moore の Representative と Stockist としてのそれまでの実績が、Camb. U. P. のような大出版社を動かしたらしい。

港区の坂と文明開化〔1〕 公使館めぐり

丸善・本の図書館 鈴木 陽二

『角川 日本地名大辞典』では、港区の地勢を「赤坂台・麻布台・高輪台と東京湾岸の低地を占め、複雑に開析された洪積層台地・傾斜面・沖積地・埋立地から成る。最高地点は北西部の南青山3丁目付近の海拔34mで東部東京湾にかけて低くなり、本区域は都内でも有数の坂の多い街である」と概観しているが、港区の坂の多いことは驚くばかりで、名のあるものだけでも111カ所を数える。江戸切絵図を見ると、東海道はこの辺りで袖ヶ浦といわれていた海岸沿いに南下しているが、海が荒れた日などはきっと波のかぶるような街道であったろう。台地はなだれ落ちるように急坂となって海に迫っているが、江戸時代、この一帯は寺の多い地域であった。

東海道から少し奥まって、ちょうど高輪台地にはめ込まれたようなかっこうで東禅寺がひっそりと静まり返っている。高輪プリンスホテルの北隣に位置する大きな寺である。東禅寺の門前から、ちょうど寺を抱くような高輪台地の縁を曲がりくねって登って行く急坂を洞坂という。その先の桂坂へ抜ける細く寂しく、まるで洞穴に入っていくような暗い坂である。「港区の坂」をめぐる物語りは、まずこの東禅寺から語り出すことにしよう。

◆東禅寺とイギリス公使館

1861(文久1)年5月28日夜半、水戸浪士有賀半弥を始めとする尊王攘夷の浪士14名が、イギリス仮公使館の東禅寺を襲った。目を覚ました門番を斬って乱入した浪士たちは公使館内を荒らし回って早曉に退去したが、この暴挙による死傷者は公使館側と襲撃者側を併せて23名にのぼる惨劇であった。

イギリスとの間で修好通商条約が締結されて、初代駐日イギリス公使オールコック(Sir Rutherford Alcock 1809-1897)が1857年に赴任し、広大な美しい庭園のある東禅寺をすっかり気に入って、ここを仮公使館として対日外交を開始した。彼が遭遇したこの夜の事件の状況は、滞日回想録『大君の都』で委曲を尽くしている。詳細はこの本や、またイギリス公使館の通訳を務めていたアレキサンダー・シーボルトの『赤羽接遇所』をお読みいただくとして、オールコックが「まるで、襲撃者たちは、

かれらの武器の強さと刀の鋭さの証拠をはっきりのおきたがっていたようだった」と述べている刀痕やピストルの弾丸の跡などが、玄関や奥書院に今でも当時のまま残されている。ちなみに、フランツ・シーボルトは幕府の招聘で待ちに待った2度目の来日を実現し、子息アレキサンダーと宿所「赤羽接遇所」に滞在中この事件に遭遇して負傷者の治療に当たっている。襲撃で公使オールコックは無事であったが、長崎領事モリソンや一等書記官オリファント(Laurence Oliphant)が重傷を負った。オリファントについては改めて述べてみたい。

この騒乱の黒幕は、幕府を英国との戦争に巻き込んで將軍位の転覆をもくろんだ水戸侯であったと『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』で報道されているが、ともあれ、事件は1万ドルの賠償金の支払いで決着した。さらに約1年後の6月26日にも、公使館護衛の松本藩士が公使館を一人で襲撃してイギリス軍人2名を斬殺した第2次東禅寺事件が起きたが、このときには1万ポンド(約4万ドル)の賠償を支払っている。この近くの品川御殿山に建設中の英国公使館を高杉晋作、伊藤博文ら長州藩攘夷派志士が襲った焼き打ち事件(1862=文久2年)や生麦事件(1862)など、幕末の江戸は攘夷志士・浪士による外人へのテロ事件が相次ぐ殺伐たる世情であった。『港区の歴史』(名著出版)によれば幕末の外人殺傷事件は15回あり、そのうち江戸では5回あったという。イギリスはこういう受難に見舞われながらも、日本近代化を進める上で最も大きな力になったといえる。次回から、この辺のことを追ってみることにしよう。



東禅寺境内。右手玄関の柱に弾痕が見られる

お求めやすい特徴を設定！
今世紀最大の教育に関するレファレンス
——世界の教育研究の集大成——

国際教育百科事典
第2版(完全改訂・増補版)/全12巻
**THE INTERNATIONAL
ENCYCLOPEDIA OF EDUCATION**
2nd Edition 12 Volumes

〈好評発売中〉

'94.

ISBN0-08-041046-4 注文番号 MBN9325470

在庫特価 ¥498,000

標準価 ¥663,600

[税別]

◆Editors-in-Chief◆

Professor Torsten Husén,
University of Stockholm, Sweden
Professor T. Neville Postlethwaite,
University of Hamburg, Germany

◆Honorary Editorial Advisory Board◆

Malcolm Adiseshia, *Madras, India* / Burton R. Clark, *Los Angeles, USA* / Gilbert De Landsheere, *Liège, Belgium* / Richard Diez-Hochleitner, *Madrid, Spain* / Michael J. Dunkin, *Sydney, Australia* / Robert Glaser, *Pittsburgh, USA* / Heitor Gurgulino de Souza, *Tokyo, Japan* / Ann Lieberman, *New York, USA* / Nikolai B. Nikandrov, *Moscow, Russia* / A. Harry Passow, *New York, USA* / George Psacharopoulos, *Washington, USA* / Lee Shulman, *Stanford, USA* / Colin Titmus, *Leeds, UK* / E.A. Yolooye, *Ibadan, Nigeria*

〈本書の特長〉

- 教育の現状水準を国際的に概観する最新かつ包括的事典
- 7,000ページ以上
- 立派な装丁の12巻本
- 主要テーマが16から21に拡充
- 次の分野の項目が新たに追加—教育社会学, 教育と女性, 教育史, 人類学
教育哲学, 教育心理学

- 140ヶ国以上の教育制度を詳細に解説
- 96ヶ国から国際的に著名な執筆者を精選
- 詳細で広汎に網羅するレファレンス
- 主題・著者・寄稿者のインデックス付き
- 関連項目がグループにまとめられた分類リストが有用

この第2版は、初版にも増して世界の教育関係者と学者にとって有用です。世界の一流の学者が、教育のあらゆる面を分析し、それは非常に技術的な実際方法から政策の分野にまで亘ります。

学生、研究者、政府の教育政策担当者、教育分野の実務者にとって必須のレファレンスです。

(Pergamon Pr., GBR)

詳細資料(No.7-93-074)がございますので、ご請求ください。



日本総代理店

〔本社・日本橋店〕〒103 東京都中央区日本橋2-3-10 ☎(03)3272-7211 振替東京7-5番

支店・営業所—東京(お茶の水・丸の内・内幸町・浜松町・アークヒルズ・渋谷・錦糸町・北千住・柏・取手・土浦・船橋)・
千葉・八王子・大宮・新堀/札幌・仙台・盛岡・筑波・水戸・横浜・静岡・浜松・名古屋・津・岐阜・金沢・京都・
大阪・神戸・姫路・岡山・松山・広島・福岡・長崎・鹿児島・沖縄/
ニューヨーク・シカゴ・ロンドン・シンガポール

1994年9月

通巻第328号

洋書輸入協会

編集者 神田 俊二

〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

☎(03)3271-6901 FAX. (03)3271-6920

印刷所—藤本綜合印刷株式会社